

# 南ぬ風

Vol.22

2012.1~3

冬号



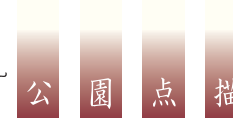
【南ぬ風インタビュー】 首里城を中心に沖縄の工芸の“美の発信”をしてもらいたい。

目白漆芸文化財研究所 漆芸家(重要無形文化財(蒔絵)保持者) / 室瀬 和美

《沖縄の色・形》 甦った伝説の焼物 古我知焼(こがちやき)



ふしがいつぱい



首里城公園

そのひゃんうたきいしもん

## 園比屋武御嶽石門

首里城の守礼門と歛会門の間にある石門で、国王が外出するときに安全祈願をした礼拝所です。形は門になっていますが人が通る門ではなく、いわば神への「礼拝の門」ともいうべき場所です。門の上部に掛けられている扁額(へんがく)の内容から1519年(尚真王(しょうしんおう)代)に建てられたことが判明しており、八重山の竹富島出身の西塘(にしとう)という役人が築造したものと伝えられています。琉球の石造建造物の代表的なものであり、1933年国宝に指定されましたが、沖縄戦で一部破壊され、1957年復元されました。1999年国指定重要文化財となっており、2000年には世界遺産へ登録されています。

# ふえー 南ぬ風 かじ

誌名『南ぬ風(ふえーぬかじ)』について  
「南ぬ風」は梅雨明けとともに南から吹き込んでくる強い風のことです。この南の風によって育まれてきた沖縄の自然や文化をさらに「南ぬ風」に載せ全国に発信することを意味しています。

この度の東日本大震災により被災されました方々に心よりお見舞い申し上げます。  
被災地の一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

## C O N T E N T S

### 南ぬ風インタビュー Vol.15 3

首里城を中心に沖縄の工芸の“美の発信”をしてもらいたい。

目白漆芸文化財研究所 漆芸家(重要無形文化財(蒔絵)保持者)／室瀬 和美



### 沖縄の色・形 6

こがちやき  
甕った伝説の焼物 古我知焼

取材協力／古我知焼 仲宗根隆明・仲宗根志野



### 事業紹介 8

公園等の管理運営 首里城公園管理センター

美術工芸品の企画展で琉球王朝の歴史・文化を伝える。

調査研究事業

沖縄産希少野生ランの開花と新産地記録／サンゴの形態と分類研究  
タイマイの人工授精に関する調査

普及啓発事業

美ら海自然誌講座「マングローブ湿地の環境と生物観察」／美ら海  
自然教室「ヤシガニのことを知ってみよう」／美ら島・美ら海こども  
工作室「実と種子でクラフトを作ろう」／首里城公園企画展「うるし  
の王国 琉球」



### 沖縄の自然 南の島の植物と動物たち 14

シリーズ 沖縄の大木⑮ アカテツ

シリーズ 沖縄の希少動植物⑮ タカクマソウ/ギンブナ



### 沖縄の民話 16

猿の長寿較べ

資料提供／NPO法人沖縄伝承話資料センター



### ニュース&イベント情報(1月~3月) 18

総合研究センター、首里城公園管理センター、  
海洋博公園管理センター

### ふしぎがいっぱい公園点描 20

その ひゃん うたき いしもん  
首里城公園 園比屋武御嶽石門



表紙について  
おばあのキャベツ畑  
名嘉睦稔(なかぼくねん)  
一九五三年伊是名島生まれ。  
版画家。造形作家。月桃紙に  
裏手彩色と呼ばれる技法で  
制作される作品群は、われわ  
れ現代人が見過ごしてしま  
いがちな大自然の機微、生きと  
し生けるものの魂の声を、時  
に優しく、時に力強く、私達  
に伝えてくれる。

### 再認識された漆の力

——漆の歴史ですが、先生のご著書に、9000年前とあり驚いているのですが。

室瀬 これは考古学の世界の話になりますが、30〜40年ぐらい前から縄文時代の出土遺物から漆器が出てくるようになって、それが3500年前、5000年前と出てくるたびに古くなってきたんです。センセーショナルだったのは、福井県の鳥浜貝塚から出てきた朱の漆塗りの櫛で6000年前の物でした。さらに、2000年に北海道の垣ノ島B遺跡で発見された赤い漆の副葬品は、何と9000年前という調査結果が出たんです。

それまでは、中国の揚子江流域の河姆渡遺跡の7000年前の漆器が世界最古といわれていましたが、重要なことは新旧よりも縄文初期に漆が使われていたという事実です。植物が豊かな日本は木が文化の主流になります。木は腐りますから

証拠が残りません。ところが漆が証拠を残してくれまして、漆の力のすごさが再認識されると同時に、日本文化の研究の上でも重要になってきたわけです。

ご承知のように漆はウルシノキの樹液で皮膚がかぶれます。そんなかぶれる液を掻き取って、接着や塗装に使ったという古代人の知恵はすごいですね。専門的な知識や



漆芸家として創作活動とともに文化財の修復に取り組んでいる室瀬先生に、漆芸の魅力や日本の伝統美について、琉球漆器とその修復作業について語っていただきました。

# 首里城を中心に沖縄の工芸の美の発信をしてみたい。

経験がないとできないことです。

### 漆芸はスローメイドの最右翼

——漆は昔から食器や家具などいろいろなものに使われていますね。

室瀬 本当にびっくりするぐらい万能な液で、こんな液が天然にあるなんて、もっと世界に誇っていいと思います。木はもちろん紙、竹、布、陶器や金属にも塗れて、なおかつ強くて耐久性があります。日本の漆器は90%以上が木胎※木胎ですが、木材は水分を多く含んでいますので、その水分を抜くのに時間がかかります。自然から材料を用立てするのには時間がかかります。それに下地をつけてきれいにしていくのに時間がかかります。更に漆を塗って装飾するのに時間がかかり、漆器1個つくるのに何



目白漆芸文化財研究所  
漆芸家(重要無形文化財(蒔絵)保持者)

室瀬 和美 *Murose Kazumi*

※木胎  
漆が塗られる素地のことを専門的に胎(たい)と呼んでいる。したがって、木胎とは木地のこと

[むろせ かずみ]1950年東京生まれ。1970年東京藝術大学美術学部工芸科入学。1973年安宅賞受賞。1974年第22回日本伝統工芸展で初入選。1976年東京藝術大学大学院美術研究科漆芸専攻終了。1991年目白漆芸文化財研究所開設。創作活動とともに文化財の修復活動に携わる。1996年～1998年国宝「梅蒔絵手箱」(三嶋大社所蔵)模造制作の他、海外でも保存修復活動を行う。2000年第47回日本伝統工芸展で東京都知事賞受賞の他、受賞多数。2001年～2007年琉球漆器復元制作。2008年重要無形文化財保持者(蒔絵)認定。(公社)日本工芸会常任理事。著書に「漆の文化―受け継がれる日本の美―」がある。

年、何十年単位の時間を要します。ただ、作った物は、それこそ1000年以上持つ財産になります。最近ではスローフードという言葉があり、漆芸はスローメイドの最右翼です。時間をかけて丁寧に作ったものを大切に、次世代に伝えていく、これは東洋の思想だと思いますが、そのために資源も大事にするという、これからの時代、考えなくてはならないことです。

また、伝統工芸品は一つ作るのにものすごく時間がかかります。特に漆器は表面に出ない工程が多くあります。ところが、この見えない工程で品質が決まるようなところがあって、そこに手間暇をかける



萬野コレクションの調査風景

いう、これは日本人の美の価値観だと思います。これには相手をおもんばかる、使う人の気持ちになるというところが根底にあります。更に言えば、自分の中にある美を表現し、相手もそれを受け入れ、それを通して対話ができて自分も相手も幸せになれるというのが、より高度な美の価値観ではないかと思えます。そういう意味からも日本の伝統美を再認識してもらいたいと思います。

### 物さえあれば 技術の復元が可能

—現在、琉球漆器の模造復元に取組まれているとのことですが、どのようなもののですか。



首里城の儀式で使われた三御飾(みつおかざり)の復元作業

好まれる光で、夜光貝の虹色の光がフワッと浮いてくるような感じが素晴らしい、私は癒しの光だと思っています。日本国内でも、宇治の平等院鳳凰堂や世界遺産になった中尊寺の金色堂などに使われています。金色堂の装飾などは琉球なくしては成り立たなかったと思います。

### 保存と創作は両輪

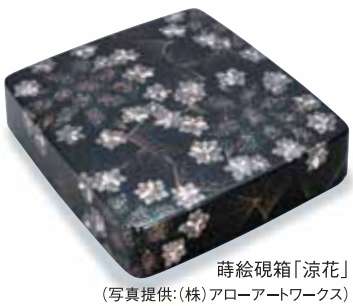
—文化財の修復で重要なこととはどのようなことでしょうか。

室瀬 一番大事なことは、歴史を消さない、ということ。壊れてきたこと、直されたこともひとつの歴史であるという認識で、現状をあまり変更しないというのが根底にあります。「これ以上傷みが進まないようにしましょう」というのが文化財修復の基本です。ですから、きれいに塗り直す、漆肌というのは300年、400年経つうちにどんどん劣化していますから、その歴史を消して全く別物になってしまう。文化財の修復というのは、その価値観を伝えていく仕事です。新しく物を作る場合と考える方が全く違います。それと、修復に関して言えば、壊れているからこそ見えるものがあって、修復だからこそ得られる情報というのがあります。そういう情報をきちっと残すことも

室瀬 徳川美術館にある重要文化財の「朱漆花鳥七宝繫密陀絵沈金御供飯」という漆器です。これは琉球の江戸上りの使節が徳川家康に献上した物で、16〜17世紀に作られた物だといわれています。漆器は道具ひとつでも雰囲気が変わってきますので、当時の道具を調べたのですが意外に残っていない、作業に携わる若い人たちに道具づくりから始めてもらいました。

技法は沈金ですが、琉球の16〜17世紀の技術というのも意外に残っていないんです。琉球漆器は琉球王府の貝摺奉行所の下で制作された、王府が使う物や徳川家や中国の清王朝への献上品でしたから、琉球王朝がなくなると同時に漆の技術もなくなるといって運命をたどったわけです。物さえ残っていれば何とかありますが、その後も太平洋戦争で本場に多くの物がなくなってしまうからですね。

文化財の復元では、物があるということがすごく重要なんです。技術が途絶えても物さえあれば技術の復元に繋がります。糸一本でも、そこから過去を遡ることが出来ます。そういう一つ一つの丁寧な作業を通して、当時の技術がどういうものだったかを知ることができ、当時の美意識を研究すれば、琉球独自の美、というものを次の世代に受け継いでいくことができるわけです。



時絵硯箱「涼花」 (写真提供: (株)アローアートワークス)



工房で創作中の室瀬先生 於:目白漆芸文化財研究所(写真提供:大堀一彦)

重要な仕事です。それと、文化財の保存ということ、どうしても、伝統を守る、ということに囚われがちですが、伝統というのは創ることもあるんです。今の時代を表現するものを創れば、100年経つと伝統が変わっていきます。100年後の人たちに、平成の美意識、ということが伝わって、それが平成の個性になるわけです。昔の物を守るといえることは、昔はこういうものが好まれていたよ、ということを伝えるわけで、今の時代の物は今の時代の物として創作していかなければなりません。文化財の保存と創作は両輪なんです。

### 美の発信と 技術者の育成

—最後に財団に対する期待やご希望などありましたらお聞かせください。

室瀬 私の立場から言えば、やはり首里城を中心として歴史、文化、特に工芸の美というものをもちと発

### 日本でも中国でもない 琉球漆器の特徴というのとはどんなところですか。

室瀬 日本の工芸すべてに共通しますが、今、私たちが表現している工芸技術というのは99%に近いぐらい中国大陸の影響を受けています。日本には大体7世紀から8世紀にかけて仏教と一緒にいろんな美術品が入ってきています。東大寺や正倉院、法隆寺などに残されている物で、これらが日本の伝統的な工芸の源になっています。琉球漆器も源は同じですが、伝わった時代が15〜16世紀初頭といわれています。

日本本土の場合は、その後、漆で描いた絵の上に金粉を蒔いて塗り込めた後に、それを研ぎ出して漆面に金の模様を出していくという時絵技術が中心となります。表現も大和絵などの絵画とマッチさせて、中国から得たものを和風化していったわけです。それに対して琉球は沈金、螺鈿、堆錦などが一度に入ってきて、技術や表現もそのまま踏襲されて、日本でいう和風化、いわゆる琉球化がなくて、そのままイメージが伝わってきたのではなにかと思います。しかし、それが琉球漆器の個性となつて、江戸時代にはいわゆる「唐物」としてもはやされ、琉球の台所を支えることに

信してもらいたいということがあります。発信の仕方にも単に「過去にこういうものがあつた」ということではなく、琉球の技がどのようにに今日まで

伝わってきたかという歴史や技の魅力を伝えると同時に、これからどうすればいいのかという、次の世代への発信も含めた活動をしていただきたいと思えます。首里城正殿も将来にわたって塗り直しが必要になりますので、やはり地元の技術者の育成、次世代を担う技術者の育成ということもやってもらいたいと思います。

漆芸について言えば、染織と同様に琉球王国の文化を担ってきたはずですが、漆芸に関しては指導者も少なく、技術研究もあまり進んでなく、染織と比べていろんな意味で立ち後れの感がありました。でも、そのレベルの高さ、内容の濃さというのは素晴らしいものがありますので、やはり首里城にいろいろな形で、美の発信、ということをやっていたいただきたいと思えます。

(平成23年10月8日沖縄県立博物館・美術館にて)



「漆の美—琉球のわざ・日本のわざ—」のタイトルで講演中の室瀬先生 於:沖縄県立博物館・美術館

こがちやき

# 甦った伝説の焼物

# 古我知焼



かつての古我知焼の手法を取り入れて製作された花器

古我知焼は壺屋焼よりも古い歴史を持つといわれていますが、十九世紀前半に窯が閉じられて以降、長い間途絶えていました。その古我知焼を復活させ、新たな作風に取り組んでいる仲宗根隆明さんの窯場を訪ね、古我知焼の歴史や特徴などについてお話を伺いました。

取材協力／古我知焼 仲宗根隆明・仲宗根志野

登り窯の前に立つ仲宗根さん



## 揃っていた窯業の条件

名護市具我の北西に源流をもつ奈佐田川が、人里に出たあたりの山側は奥又原と呼ばれています。かつて古我知焼の窯場はこの奥又原の一角にあり、その窯跡には「古我知焼窯跡」の石碑が立てられています。古我知は地名で、旧羽地村（現・名護市）の西側に位置し、北は今帰仁村に隣接しています。その昔、近隣の我部祖河や伊差川と一つの集落を形成していたようで、「琉球国高嶺峯」（十七世紀中頃編纂）には「こがち村」の名が見られます。かつて、この古我知一帯には高温に耐えることができる白土が出土し、赤土や灰色の土など五種類の陶土が採取できたといわれています。また、羽地内海に注ぎ込む奈佐田川は水量が豊富で、この奈佐田川を船で漕ぎ通って窯場まで運ばれたようです。



沖縄県指定文化財(史跡)の石碑(昭和47年5月12日に指定される)

古我知焼が船で各地に運ばれていたことは、山原船が発着しているという考古学の発掘調査によって示されており、その歴史は一六五〇年ごろに遡るとされています。ちなみに壺屋窯の中

の窯跡が一九七二年に県の文化財に指定されました。名護市では幻の古我知焼が失われてはならないと、復興の担い手として、琉球大学工芸美術学科を卒業し、壺屋焼の窯元で修業をしていた屋我地出身の仲宗根さんに白羽の矢を立てました。当初から古我知焼に関心のあった

法は還元炎焼成といわれています。これは窯に薪をどんどん入れていき、窯の中の酸素をやや少なめにして焼く方法です。窯の中が酸欠状態になると、炎は窯の中の空気からではなく土や釉薬から酸素を奪って燃焼します。その影響で焼物に色々な変化が表れてくるそうです。このため、仲宗根さんも窯に火を入れるときは、ひと時も気を休めることなく薪を入れ続けていくといわれています。この他にも、仲宗根さんは、現存する古我知焼の各種土器を丹念に調べて土の成分を分析したり、釉薬の塗り方を研究して古我知焼の復元に努めてきました。その作品は窯場に隣接する展示販売所で味わい楽しむ



仲宗根さん親子のセンスが光る展示販売所。左は花器。上、右は茶碗などの生活雑貨



いきなり釉薬を素地につける方法です。しかも、その釉薬を藁や布で拭きながら塗っていました。現在、残っている厨子甕などをみると大胆な拭き目が残っています。柄杓でいきなり釉薬をかけると、土が急激に水分を吸って割れることが多く、ひび割れを防ぐために藁や布で拭いたようにです。これについては、「いろいろと言う人もいますが、ひび割れを防ぐためであり釉薬を節約するためには決してなかったと思います」と語っています。また、古我知焼に多くみられる焼成方

「古我地焼をもっと知ってもらいたい」と語る仲宗根さん(右)と「もっともっと勉強をしなくては」と語る娘の志野さん(左) 古我知焼/沖縄県名護市我部祖河916 TEL:0980-52-0727



「古我地焼をもっと知ってもらいたい」と語る仲宗根さん(右)と「もっともっと勉強をしなくては」と語る娘の志野さん(左) 古我知焼/沖縄県名護市我部祖河916 TEL:0980-52-0727

※資料：「灰釉碗からみた近世沖縄古窯の編年」(沖縄県立博物館紀要・第12号所収)

「いろいろと言う人もいますが、ひび割れを防ぐためであり釉薬を節約するためには決してなかったと思います」と語っています。また、古我知焼に多くみられる焼成方

種土器を丹念に調べて土の成分を分析したり、釉薬の塗り方を研究して古我知焼の復元に努めてきました。その作品は窯場に隣接する展示販売所で味わい楽しむ

「古我地焼をもっと知ってもらいたい」と語る仲宗根さん(右)と「もっともっと勉強をしなくては」と語る娘の志野さん(左) 古我知焼/沖縄県名護市我部祖河916 TEL:0980-52-0727



釉薬を拭いたような跡が見られる厨子甕(年代不明)

仲宗根さん、「古我知焼の復興と現代化に取り組んでほしい」との申し出を引き受け、名護市の支援を得て窯場跡近くに登り窯を設置し、一九七四年三月に初窯を出しました。「美術品として重宝されるのでもいいですが、陶器は日常的に使われるなかで輝いてくるもの、そこに焼物の本当の魅力があるのではないか」ということで、伝統を意識しつつも生活必需品に取り組むことになりました。

## 生掛けと還元炎焼成

古我知焼の特徴については、「何とんでも施釉の上焼であること、それと土の温度が高いということ、また、上焼でありながら小物から大物までというのが特色ですね」と仲宗根さん。

施釉についても生掛けという方法が採られていました。それは素焼きせずに、

【国営沖縄記念公園(首里城公園)】

首里城公園管理センター 事業課 調査展示係

## 美術工芸品の企画展で 琉球王朝の歴史・文化を伝える。



収蔵品の漆器を梱包材から取り出すところ。塗膜の疵や剥がれなどに気をつけて丁寧に扱います。宇保朝輝さん(左)と松田一美さん(右)

### 調査・収集・修復・復元

首里城には、琉球王朝時代に製作された美術工芸品が多く収蔵されています。これらは琉球の歴史・文化を知るための貴重な文化財です。首里城では、これら文化財の様々な企画展を年間を通して開催し、首里城南殿の特別展示室において一般公開しています。この企画展の運営を行っているのが首里城公園管理センターの調査展示係です。

企画展での展示品は当財団の収蔵品が中心になりますが、琉球王朝時代の美術工芸品は県外や海外に散逸しているものも多くあります。また、収蔵品の中には長い年月を経て傷んでいるものもあり、散逸している美術工芸品の調査や収集、収蔵品の修復や復元などが調査展示係の主な仕事です。



「調査や復元のほか収蔵品の保管管理(空調の点検や害虫対策など)も行っています」と語る幸喜淳さん(右)と久場まゆみさん(左)

### どう見てもらえるか、何を伝えたいか

展示係幸喜淳さん。復元にあたっては「復元検討委員会」を設置して、資料の作成や委員の先生方の日程調整、実際に復元作業にあたる人たちとの話し合いなど、委員と現場との橋渡しの役割を担い、検討委員会のスムーズな運営を図っています。

修復や復元で一番多いのは漆器類ですが、染織品や書跡、絵画などもあり、そのための情報収集も重要になります。「色々なところとのネットワークづくりが大切になりますね」と久場まゆみさん。情報収集先としては大学や博物館関係が圧倒的に多いといえます。

おり、『春の特別展』(3/23/31)も開催の予定です。企画展『首里城のデザイン』では、花の中の王様「百花王」と呼ばれ、首里城正殿にも使われていた牡丹の模様をテーマにした琉球の衣裳や祭祀道具を紹介したり、王の玉座を飾った葡萄と栗鼠の模様をテーマとした琉球漆器の展示など、首里城のデザインの特徴をシリーズで紹介しています。

「展示物は手で触ってみてもらうわけにはいきませんので、お客さまにどのように見てもらうか、何をどう伝えるかに苦心しています」と幸喜さん。企画展開催にあたっては、展示内容の検討や作業手順の組み立て、実際のシミュレーションも行います。その他、企画展の案内チラシの製作やホームページへの掲載などの広報活動や、展示に設置するパネルやポップのデザインの検討、展示物の説明文も作成します。説明文の内容が的確で分かりやすいか、記述内容に間違いはないか、スタッフ全員で何度もチェックを行っています。

展示作業にあたっては展示物を持って渡す人、展示ケースの中で受け取る人と役割を決めて、展示物の持ち方や渡し方にも注意を払っています。「貴重なものばかりで

### 展示スペースの検討と展示品の充実

緊張して結構疲れますが、大切な文化財を間近に見れて直接触れることができるのは、財団の中では調査展示係だけです。喜びを感じています」と久場さん。



展示作業は首里城閉館後。展示内容にもよりますが大体4時間ぐらいかかります



興味をもって、楽しんで見てもらえるようにと工夫したポップ

また、調査展示係では、日頃から新人職員に首里城の文化財のレクチャーを行っています。企画展開催の際にも、展示品については、案内ガイドや警備員も含めてレクチャーを行っています。「大人の質問よりも、むしろ子どもたちの『なぜ赤いの?』というような素朴な質



上: 新人職員へのレクチャー。首里城の文化財全般についての知識習得を目的としています  
下: 企画展開催に際してのレクチャー。企画展における展示品の説明の仕方について講義を行います

問のほうが難しく、説明するのに苦労しています」と幸喜さん。「すぐに教えるのではなくて、調べる楽しさを知ってもらいたい」ということもあって、図書館や本を紹介することもありますが」と久場さん。

「今度、黄金御殿が整備されますので、そこへの展示物も検討しなければなりません。また、復元事業でかなりのものが形になつてきていますが、これらも実際に首里城にあつたであろうというものを収集、復元して展示していきたいと思っています」と幸喜さん。「企画展の企画そのものが立てられるように、美術工芸品のことをもっともつと勉強しなくてはと思っています。物が分からないと企画のしようがないですからね」と久場さん。企画展と展示品の一層の充実が期待されます。

### 〔亜熱帯性動植物に関する調査研究〕

#### 沖縄産希少野生ランの開花と新産地記録

当財団では沖縄産希少植物に関する自生地及び栽培調査を過去15年以上にわたり継続し保護保全に役立ててきています。その一環として、絶滅寸前の野生ランにおける開花記録や県内での新産地記録など



沖縄産のムロトムヨウランの開花状況



沖縄産のイリオモテランの開花状況

の調査を実施しています。  
《絶滅寸前の野生ラン開花記録》

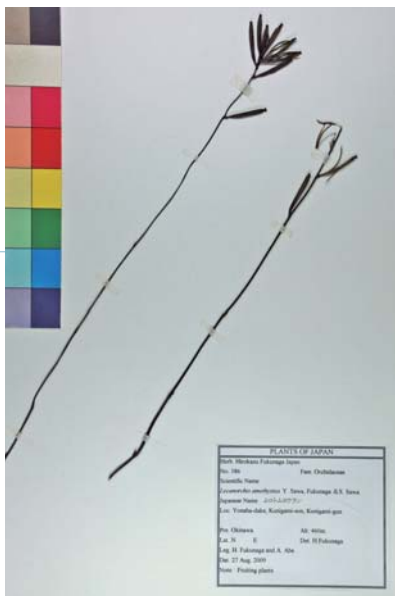
イリオモテラン (*Trichoglottis ionana*) は、石垣島、西表島、魚釣島、台湾、フィリピンに自生する着生ランです。かつては各自生地に点在していましたが古くから観賞用として乱獲されたため現在では絶滅寸前です(沖縄県レッドデータブックのカテゴリーⅡ絶滅危惧ⅠA類、環境省Ⅱ絶滅危惧ⅠB類)。平成21年4月に地元の野生ラン保護団体の協力のもと、自生地において本種の開花記録、地形、植生、光条件、風条件等の生育環境調査、位置情報記録を実施してまいりました。調査では15個体中2個体

の調査を実施しています。  
《絶滅寸前の野生ラン開花記録》

の開花(計12花)を確認しました。葉数2〜7枚、草丈30センチ前後と個体サイズは小さく、人手の入らない急斜面に生えるモチノキ科の小高木に着生がみられました。県内における野生での生育環境データ及び開花記録は大変貴重です。

#### 《県内における新産地記録》

平成21年8月に福永裕一氏(農学修士)、澤進二郎氏(熊本大学大学院自然科学研究科教授)と標本採取、生育環境調査、形質確認等の共同研究を行ない、沖縄県内常緑広葉樹林の林床にて、ムロトムヨウラン (*Leiorhiza amabilis*) を県内新産地として記録報告しています。本種はこれまで高知県のタイプ産地しか分布が確認されておらず、地域固有種である可能性も示唆されていた種類です。今回発見した個体は生育地が国定公園内にあり、比較的自然環境は保全されているものの、



沖縄産のムロトムヨウランの結実個体標本(琉球大学理学部保管)  
写真提供:琉球大学理学部海洋自然科学科教授 横田昌嗣氏

#### サンゴの形態と分類研究

生育個体数は非常に少なく、菌従属栄養の微妙な生育環境下で育つため、生育基盤は脆弱であり、また珍しさから盗掘のおそれもあります。高知県レッドリスト2010年改訂版では「DD(情報不足)」のカテゴリーに指定されており、沖縄県並びに全国版においてもレッドデータブック対象種の範疇に含まれるものと思われまます。

今後は、未だ詳細が解明されていない野生ランの調査観察を継続し、生育地一帯を視野に入れた沖縄産ラン科植物の保全について研究を進めていきます。

(阿部 篤志)

サンゴ礁を形成する造礁サンゴ(以下、サンゴ)は、炭酸カルシウムの外骨格を形成するクラゲやイソギンチャクに近い動物で、刺胞動物と呼ばれるグループに含まれています。私たちが人間を含めたほとんどの動物が個体(単体)であるのに対し、サンゴは小さな個体(ポリプ)からなる群体と呼ばれる体の構造をしています。

動物の分類は、基本的に形の違いに基づいて行われますが、サンゴの場合、群体全体の形と個体の骨格を詳しく調べることが可能となります。

《今後の課題》  
人工授精技術確立のためには、適正な精液の注入場所や注入時期、排卵誘発の時期など、まだまだ調査すべき内容はつきまません。今後も引き続き調査を実施していきます。

(河津 勲)



野外に生育するトゲスギミドリイシ



トゲスギミドリイシの骨格(穴のあいているところ1つ1つが個体)

細に観察・計測して行います。しかし、サンゴは生息する環境によって、同じ種でも群体形とともに個体の形や大きさが変化することで知られているので、実際に分類するのは

#### タイマイの人工授精に関する調査

根気と経験が必要です。私たちがサンゴの形に注目し、骨格形態の観察と交配実験によって、どこまでが種内の変異で、どこからが別種か? について研究しています。4年にわたる研究の結果、16年間、水槽で飼育したトゲスギミドリイシというサンゴには種内変異が存在し、同種であっても形態が異なる群体がいる可能性が明らかになりました。群体であるサンゴとその形について、またサンゴの種については、まだまだ分からないことが多いのですが、水槽の中のサンゴをじっくり観察できる利点を活かし、サンゴの形の謎について解明したいと考えています。

(山本 広美)

タイマイは熱帯や亜熱帯域に分布し、国内での主な産卵地は沖縄を含む南西諸島です。ウミガメ類の中でも最も絶滅が危ぶまれ、様々な法律により捕獲が規制されています。我が国では、タイマイの甲羅はべつ甲細工の原料として利用されてきましたが、1980年にワシントン条約に加盟したことにより甲羅輸入が全面禁止され、我が国の伝統文化であるべつ甲産業が衰退の一途

をたどっています。タイマイ資源の増加やべつ甲産業の振興を図るためには、単なる保護のみならず、積極的な繁殖を推進し、資源回復を推進する必要があります。

人工授精は、産卵場が併設された大規模な飼育施設が不要なこと、優れた遺伝形質を選択することができること、交尾困難な個体でも繁殖可能となることなど、飼育下での自然繁殖と比べて繁殖効率が良いと考えられます。このような背景から、我々はタイマイの人工授精技術確立に向けて取り組んでまいりました。

《精液採取》  
精液採取では、家畜で実施されている電気刺激法を応用し、その方法について調査しました。ウミガメ用に電極を改良し、刺激場所を模索した結果、現在では良質な精液の採取に成功しています。また、最も精液を採取しやすい時期や方法についても判明しました。

《排卵誘起、産卵誘起》  
タイマイは交尾排卵動物なので、交尾を経験しない人工授精の場合では、雌タイマイに精液を注入したとしても受精しません。我々は排卵をホルモン剤で促すため、排卵誘起剤を特定するための調査を行いました。その結果、FSH(卵巣刺激ホルモン)製剤を投与することにより、排卵が促され、有殻卵を形成することが分かりました。また、形成され



精液の採取状況

### 【亜熱帯性動植物に関する普及啓発】 美ら海自然誌講座 「マングローブ湿地の環境と生物観察」



ヒルギ類の観察

教育関係者やネイチャーガイド等を対象とした専門家向け講座として、美ら海自然誌講座「マングローブ湿地の環境と生物観察」(講師：財団参与西平守孝)を8月に金武町「ネイチャーみらい館視聴覚室」及びその近隣のマングローブ湿地にて開催しました。

午前にマングローブ湿地生態系の概要と棲息する生物の種類や分布、棲み込み連鎖、マングローブ林の植生等についての解説を行いました。午後は、受講者15名を3グループに分け、億首川のマングローブ湿地にて開催しました。

養うことを目的に美ら島・美ら海子ども工作室を開催しており、10月にさまざまな実や種でクラフト作りを行う教室を開催しました。(講師：普及開発課職員)

使用した材料は、マンゴー、アセロラ等の熱帯果実や、イタジイ、オキナワウラジロガシ、マテバシイ等のドングリ、サキシマスオウノキ、ソテツ、ゴーヤー、イルカンド、キョウチクトウ等51種類の主に沖縄の植物の種子を用いました。これらの種子は、結実時に種を捨てずに取っておいしく食べたり種を捨てずに取っておいしく食べたり、海岸や川で拾うなどして、約1年かけて収集してきたものです。

工作に入る前に、植物の実と種子の特徴や、種子に穴をあける、接着する、色を塗る等、クラフト作りの方法についてスライドを使って解説しました。解説の後、参加者は各々が使用したい材料を選び、いろ



さまざまな木の実

地にて、シオマネキ類の観察をしながらその見分け方を解説した後、糸で1辺四方の区画を各グループ5個ずつ作り、その中に出現するオキナワハクセンシオマネキのオス・メス比や、オキナワハクセンシオマネキ及びヒメシオマネキの雄の巨大鉗脚について、左右どちらについている個体が多いかを数えて記録しました。シオマネキ類の調査後は、億首川沿いを散策しながら、マングローブ植物の観察及びその他動植物の観察を行いました。億首川ではメヒルギ、オヒルギ、ヤエヤマヒルギ、ヒルギモドキが見られます。これらの花や葉の形、樹皮、樹形、支柱根等により見分け方を学び、オヒルギ、メヒルギ、ヤエヤマヒルギについてそれぞれの花を無作為に20個選び、萼片数を数えて記録を行いました。

湿地での観察と調査を終え、視聴覚室にて集計し調査結果を交えながら復習を行いました。当日は晴天でたいへん暑い中の野外観察となりましたが、参加者は熱心に調査に取り組み、講師に質問をするなど積極的に学習していました。参加者の中には日頃からNPOの活動でマングローブ類の保全活動を行っている高校生6名も参加しており、熱心に調査に取り組んでいました。これからの活動におけるリーダーとして活躍して行くことと思います。

(篠原 礼乃)



サキシマスオウノキの種子で作ったネズミ

いろいろな種を組み合わせてイノシシやシカ、ネズミ、ヨット等を製作しました。また、素材の形をそのまま利用して色を塗りスイカを作るなど、ペイントを楽しむ姿も見られました。その他にもネジや糸を用いてキーホルダーやアクセサリにするなどみなさん思い思いに工作を楽しんでいました。(篠原 礼乃)

### 【首里城に関する普及啓発】 首里城公園企画展 「うるしの王国 琉球」

企画展「うるしの王国 琉球」は、平成22年7月9日から平成23年4月22日、南殿二階特別展示室にて開催しました。当企画展は、王府内での祭祀道具や貴人の食物入れとして使われた漆器、幕府や大名への献上用であった漆器や尾張徳川家に伝来する琉球楽器を同一の材料と技術で復元した楽器等、4つの

### 美ら海自然教室 「ヤシガニのことを知ってみよう」

ヤシガニは陸棲最大の甲殻類で、ヤドカリの仲間です。主に沖縄島以南に生息していますが、食用等を目的とした乱獲や生息域の消失により絶滅の危険性が増大しています。海洋博公園では本種が頻繁に確認されており、分布の北限近くにおける唯一のまとまった個体群と判断されます。当財団では、当個体群について、生態及び生息状況の調査を平成18年より行ってきました。その調査の成果とヤシガニという生物について知ってもらうことを目的に10月に美ら海自然教室「ヤシガニのことを知ってみよう」(講師：研究第一課岡慎一郎)を開催しました。



ヤシガニに実際に触れる参加者

テーマに沿って紹介する連続企画展でした。また、首里城正殿の漆の塗り直しを行っているので、漆塗装に関する理解を深めるため、事業の意義や27の作業工程表を掲示しました。

第一弾の「神に捧げたうるしのうつわ」では、祭祀行事の時に、供物と二緒に供えられた食籠という蓋がある2段の漆器や、食籠等の台となる足付盆、ガラス玉を糸で編んで覆った錫製の徳利である御玉貫も同じ展示ケースに並べ、行事の必需品であった道具を揃えて見せました。また、食籠の丸い蓋がどのように作られているのか、王国時代の漆器製作の技術についても紹介しました。第二弾「ごちそうを盛る うるしのうつわ」では、長方形や丸型の東道盆7点や現在の魔法瓶のような機能の湯庫、重箱の他、徳利や小皿が収納されたピクニックセットのような提重も展示し、琉球王国時代でも、様々な用途に合わせた漆器が製作されていたことを紹介しました。東道盆の模様が多くが山や川に遊ぶ人が堆錦技法で表現されており、比べて見る



舞楽図

のも楽しい展示となりました。第三弾「献上された琉球楽器」では、復元した楽器21点の他、楽器を演奏している楽童子が描かれた絵画等を併せて展示しました。第四弾「青貝の輝き」では、貝片が1行ほどの螺鈿細工が施された印籠や貝片の色合いを上手く使った牡丹や龍が描かれた盆や古文書の図とほぼ同一の香炉を置く台である中央卓等を展示しました。また、企画展毎にアンケートを実施し、満足度が、全期間を通して9割が「非常に面白かった」「面白かった」という回答を得ました。多くの方々に漆塗装の大切さや琉球王国時代から伝わる漆器の種類や漆の技法について、普及啓発することができました。(久場 まゆみ)



「神に捧げたうるしのうつわ」展示風景

講義では、ヤシガニの生態や沖縄の生活の中でどのように利用されてきたか等について解説をした後、観察を行いました。観察の際には、実際に生きているヤシガニに触れてもらいました。大きなハサミに参加者はビックビックしながらも、興味深く触れていました。次に、当財団で行っている調査においてヤシガニの個体識別方法として使用している甲羅の模様による写真カードを用いたマッチングを行ってもらいました。また、胸長計測による年齢の推定を行いました。食用にされる大きさになるまで、雄で20年、雌で30年もかかることを知って驚いた様子でした。最後に資源保護と持続的利用に関する議論をグループごとに行い、発表してもらったところ、こどもたちからは「保護区を設定する」「養殖する」、大人からは「公共工事にヤシガニへの配慮を義務づける」等様々な意見が出ていました。今後このような希少動植物等への理解を深めてもらえるような教室を開催していきます。(篠原 礼乃)

### 美ら島・美ら海子ども工作室 「実と種子でクラフトを作る」

総合研究センターでは、身近にある石や植物を材料にするなどして、多様な玩具作りを行い、創造性を



### 【亜熱帯性動植物に関する普及啓発】 美ら海自然誌講座 「マングローブ湿地の環境と生物観察」



ヒルギ類の観察

教育関係者やネイチャーガイド等を対象とした専門家向け講座として、美ら海自然誌講座「マングローブ湿地の環境と生物観察」(講師：財団参与西平守孝)を8月に金武町「ネイチャーみらい館視聴覚室」及びその近隣のマングローブ湿地にて開催しました。

午前にはマングローブ湿地生態系の概要と棲息する生物の種類や分布、棲み込み連鎖、マングローブ林の植生等についての解説を行いました。午後は、受講者15名を3グループに分け、億首川のマングローブ湿地にて開催しました。

養うことを目的に美ら島・美ら海子ども工作室を開催しており、10月にさまざまな実や種でクラフト作りを行う教室を開催しました。(講師：普及開発課職員)

使用した材料は、マンゴー、アセロラ等の熱帯果実や、イタジイ、オキナワウラジロガシ、マテバシイ等のドングリ、サキシマスオウノキ、ソテツ、ゴーヤー、イルカンド、キョウチクトウ等51種類の主に沖縄の植物の種子を用いました。これらの種子は、結実時に種を捨てずに取っておいしく食べたり種を捨てずに取っておいしく食べたり、海岸や川で拾うなどして、約1年かけて収集してきたものです。

工作に入る前に、植物の実と種子の特徴や、種子に穴をあける、接着する、色を塗る等、クラフト作りの方法についてスライドを使って解説しました。解説の後、参加者は各々が使用したい材料を選び、いろ



さまざまな木の実

地にて、シオマネキ類の観察をしながらその見分け方を解説した後、糸で1辺四方の区画を各グループ5個ずつ作り、その中に出現するオキナワハクセンシオマネキのオス・メス比や、オキナワハクセンシオマネキ及びヒメシオマネキの雄の巨大鉗脚について、左右どちらについている個体が多いかを数えて記録しました。

シオマネキ類の調査後は、億首川沿いを散策しながら、マングローブ植物の観察及びその他動植物の観察を行いました。億首川ではメヒルギ、オヒルギ、ヤエヤマヒルギ、ヒルギモドキが見られます。これらの花や葉の形、樹皮、樹形、支柱根等により見分け方を学び、オヒルギ、メヒルギ、ヤエヤマヒルギについてそれぞれの花を無作為に20個選び、萼片数を数えて記録を行いました。

湿地での観察と調査を終え、視聴覚室にて集計し調査結果を交えながら復習を行いました。当日は晴天でたいへん暑い中の野外観察となりましたが、参加者は熱心に調査に取り組み、講師に質問をするなど積極的に学習していました。参加者の中には日頃からNPOの活動でマングローブ類の保全活動を行っている高校生6名も参加しており、熱心に調査に取り組んでいました。これからの活動におけるリーダーとして活躍して行くことと思います。

(篠原 礼乃)



サキシマスオウノキの種子で作ったネズミ

いろいろな種を組み合わせるイノシシやシカ、ネズミ、ヨット等を製作しました。また、素材の形をそのまま利用して色を塗りスライカを作るなど、ペイントを楽しむ姿も見られました。その他にもネジや糸を用いてキーホルダーやアクセサリにするなどみなさん思い思いに工作を楽しんでいました。(篠原 礼乃)

### 【首里城に関する普及啓発】 首里城公園企画展 「うるしの王国 琉球」

企画展「うるしの王国 琉球」は、平成22年7月9日から平成23年4月22日、南殿二階特別展示室にて開催しました。当企画展は、王府内での祭祀道具や貴人の食物入れとして使われた漆器、幕府や大名への献上用であった漆器や尾張徳川家に伝来する琉球楽器を同一の材料と技術で復元した楽器等、4つの

### 美ら海自然教室 「ヤシガニのことを知ってみよう」

ヤシガニは陸棲最大の甲殻類で、ヤドカリの仲間です。主に沖縄島以南に生息していますが、食用等を目的とした乱獲や生息域の消失により絶滅の危険性が増大しています。海洋博公園では本種が頻繁に確認されており、分布の北限近くにおける唯一のまとまった個体群と判断されます。当財団では、当個体群について、生態及び生息状況の調査を平成18年より行ってきました。その調査の成果とヤシガニという生物について知ってもらうことを目的に10月に美ら海自然教室「ヤシガニのことを知ってみよう」(講師：研究第一課岡慎一郎)を開催しました。



ヤシガニに実際に触れる参加者

テーマに沿って紹介する連続企画展でした。また、首里城正殿の漆の塗り直しを行っているので、漆塗装に関する理解を深めるため、事業の意義や27の作業工程表を掲示しました。

第一弾の「神に捧げたうるしのうつわ」では、祭祀行事の時に、供物と二緒に供えられた食籠という蓋がある2段の漆器や、食籠等の台となる足付盆、ガラス玉を糸で編んで覆った錫製の徳利である御玉貫も同じ展示ケースに並べ、行事の必需品であった道具を揃えて見せました。また、食籠の丸い蓋がどのように作られているのか、王国時代の漆器製作の技術についても紹介しました。第二弾「ごちそうを盛る うるしのうつわ」では、長方形や丸型の東道盆7点や現在の魔法瓶のような機能の湯桶、重箱の他、徳利や小皿が収納されたピクニックセットのような提重も展示し、琉球王国時代でも、様々な用途に合わせた漆器が製作されていたことを紹介しました。東道盆の模様が多くが山や川に遊ぶ人が堆錦技法で表現されており、比べて見る



舞楽図

のも楽しい展示となりました。第三弾「献上された琉球楽器」では、復元した楽器21点の他、楽器を演奏している楽童子が描かれた絵画等を併せて展示しました。第四弾「青貝の輝き」では、貝片が1行ほどの螺鈿細工が施された印籠や貝片の色合いを上手く使った牡丹や龍が描かれた盆や古文書の図とほぼ同一の香炉を置く台である中央卓等を展示しました。また、企画展毎にアンケートを実施し、満足度が、全期間を通して9割が「非常に面白かった」「面白かった」という回答を得ました。多くの方々に漆塗装の大切さや琉球王国時代から伝わる漆器の種類や漆の技法について、普及啓発することができました。(久場 まゆみ)



「神に捧げたうるしのうつわ」展示風景

講義では、ヤシガニの生態や沖縄の生活の中でどのように利用されてきたか等について解説をした後、観察を行いました。観察の際には、実際に生きているヤシガニに触れてもらいました。大きなハサミに参加者はビックビックしながらも、興味深く触れていました。次に、当財団で行っている調査においてヤシガニの個体識別方法として使用している甲羅の模様による写真カードを用いたマッチングを行ってもらいました。また、胸長計測による年齢の推定を行いました。食用にされる大きさになるまで、雄で20年、雌で30年もかかることを知って驚いた様子でした。最後に資源保護と持続的利用に関する議論をグループごとに行い、発表してもらったところ、こどもたちからは「保護区を設定する」「養殖する」、大人からは「公共工事にヤシガニへの配慮を義務づける」等様々な意見が出ていました。

今後このような希少動植物等への理解を深めてもらえるような教室を開催していきます。

(篠原 礼乃)

### 美ら島・美ら海子ども工作室 「実と種子でクラフトを作る」

総合研究センターでは、身近にある石や植物を材料にするなどして、多様な玩具作りを行い、創造性を



和名:アカテツ  
科名:アカテツ科  
学名:Planchonella obovata

シリーズ 沖縄の大木 ⑮

アカテツ

アカテツはアカテツ科の常緑高木で、日本（トカラ列島、小笠原）・台湾・南中国・インド・マレーシア・ミクロネシア・ポリネシアに分布します。材は赤褐色で潮風に強く、防潮防風林や公園樹・庭園樹等としても利用されています。材質が堅緻で、比重及び強度も大きいことから建築材としても優れています。また、遠くから見ると樹木全体が、赤みがかって見えます。沖縄県国頭村安田の海岸沿いには、アカテツハマビワ群落やアダシ林が帯状に長く分布しています。なかでもアカテツは、集落に隣接しており、潮風害から安田集落を守ってきたことがうかがえます。樹齢は、沖縄県緑化推進委員会「おきなわ・ふるさとの名木」によれば、推定170年〜220年、幹周りも約280センチメートルに達します。本種は、沖縄島の海岸地域に多く点在しますが、群落として発達した例は少なく、貴重なものといえます。国頭村では、安田集落に隣接し広がる、このアカテツを含む保安林を村の天然記念物として指定し、大切に保護しています。  
(大城 治)

シリーズ 沖縄の希少動植物 ⑮

植物  
林床に生える腐生ラン  
タカクマソウ

本種は山地林内の落ち葉の間に生育する腐生のラン科植物です。植物体はとも小さく、株丈は5〜10センチほどで、全体が赤紫色を帯びています。葉は鱗片状で長さ1〜2センチと小さく、茎上部に2〜5センチほどの花序を出します。花序につく花は4〜10個で、上部の方には雄花が、下部には両性花がつけます。  
学名である「*Sciaphila*」は「scia（日陰、影）」と「*philia*（愛、好、

朋友）」からなり、本種が生育するの日に日陰を好むことから名づけられました。また「*takakumensis*」は、本種が鹿児島県の高隈山で初めて発見されたことに因んでいます。タカクマソウは、もともと自生地と個体数が極めて少なく、自生地は国内でも2ヶ所しか知られていませんが、うち一つは国指定の天然記念物となっています。  
(長田 尚子)



和名:タカクマソウ  
科名:ラン科  
学名: *Sciaphila takakumensis*  
レッドデータカテゴリー:  
絶滅危惧IA類(沖縄県)、絶滅危惧IA類(環境省)

動物  
雌だけで繁殖する魚  
ギンブナ

ギンブナは全国各地の河川や池沼に生息する淡水魚で、沖縄での方言名「ターイユ（田の魚）」からも、かつては里山などで普通に生息していた状況が想像できます。

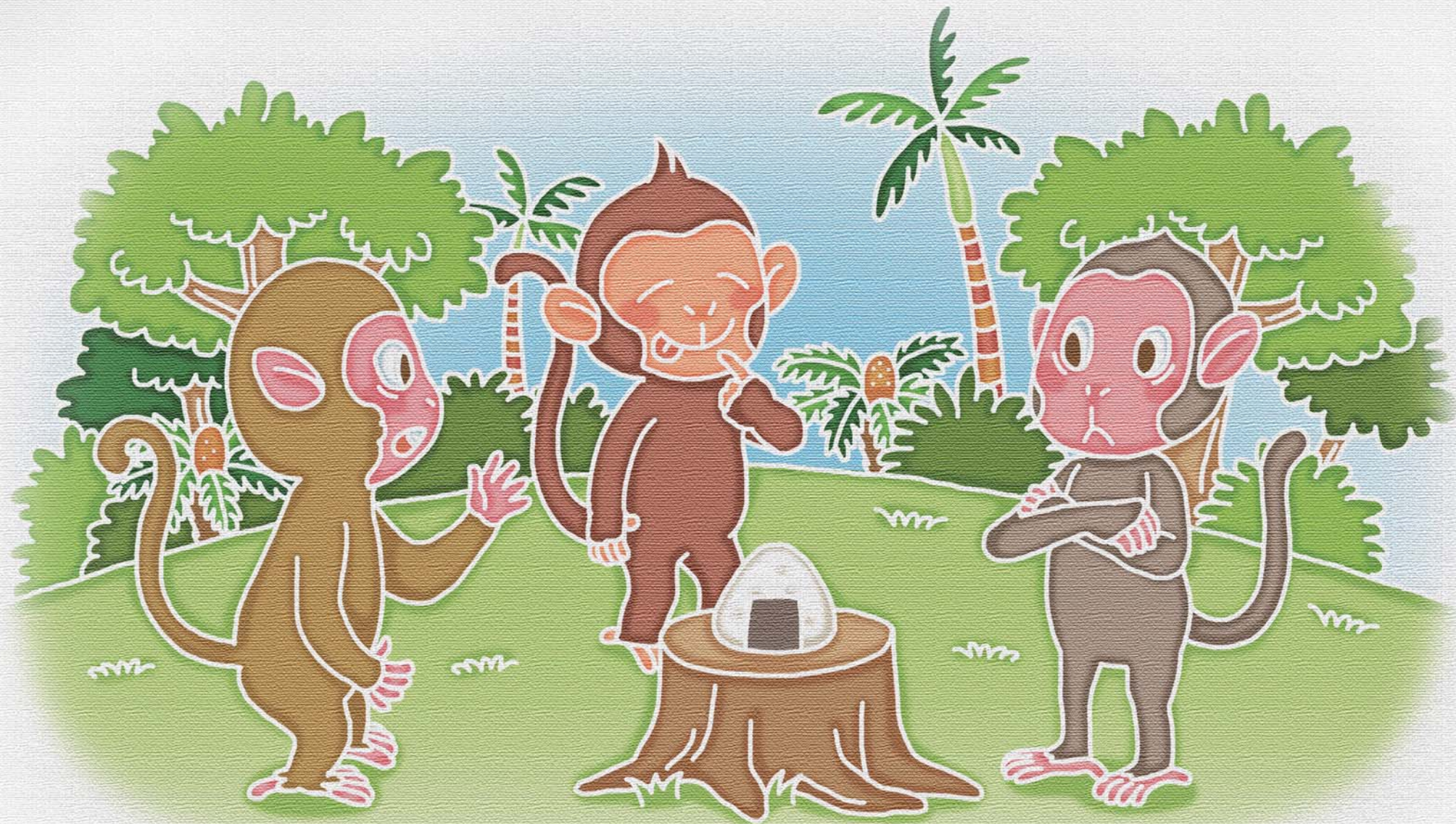
ギンブナの大部分は染色体数の多い特殊な集団で構成されており、これらは全て雌です。これらの卵は受精を必要とせず、外的刺激等によって発生が進みます。つまり、雌のみで繁殖する極めて特殊な脊椎動物です。

琉球列島のギンブナは他の国内個体群とは異なる遺伝集団であることが最近の研究で明らかにされましたが、人為的に持ち込まれた他地域の集団との交雑による遺伝子の汚染が進んでいる現状にあります。また、開発に伴う生息環境の減少や、外来種による卵や稚魚への食害も本種の生息を脅かしています。  
(岡 慎一郎)



和名:ギンブナ  
科名:コイ科  
学名: *Carassius auratus langsdorffii*  
方言名:ターイユ  
レッドデータカテゴリー:  
絶滅危惧II類(沖縄県)

# 猿さるの長寿くら較くらべ



昔々、あるところに唐(とー)の猿と大和(やまとう)の猿と琉球の猿の三匹がいたそうさ。三匹はひじょうに仲のいい友だちで、毎日、何するのもしつよだったらしい。

あるとき、三匹が散歩していると、にぎり飯がひとつ落ちていたのを見つけたそうさ。

それを拾った琉球の猿が、「みんなで分けて食べよう」と言ったら、唐の猿が「物を喰うのは年上の者からというじゃないか。年上の者から先に食べるものだ」といったそうさ。大和の猿も「そうだな」と賛成した。

琉球の猿が「じゃあ、あんたはいくつになるのか」と唐の猿に聞いた。唐の猿は、「んー、私が生まれたのはいつかは、はつきりと分からないが、そのときはね、まだ天と地がくっついていたなあ」と答えた。

今度は大和の猿に、「あんたは、いつ生まれたのか」と聞いたら、大和の猿は、「えーとね、私もいつ生まれたかわからないが、私が生まれたときには

海の潮は、貝殻の一杯分しかなかったけど、今ではこんなに増えてしまったよ」と答えた。

しばらくして、二匹の話聞いた琉球の猿は、シクシクと泣き始めた。それを見た大和の猿と唐の猿は驚いて、「いったいどうして泣くんぞ?」と聞いた。

すると琉球の猿は、「いや、私はね、あんたたちを見てみると孫を思い出してしまって、泣いてしまったんだよ」と答えた。「私の孫が生きていればねえ、あんたたちと同じ年頃であったのにと思うと、もう、悲しくて悲しくてたまらなくて涙が出るんだよ」と言って、またワーワーと泣き出したそうさ。

すると、唐の猿も大和の猿も、「そうか、琉球の猿は私たちよりもずっと年上なんだなあ」と思っただから、琉球の猿よ、あんたが食べるのが当然だな」ということで、琉球の猿ににぎり飯をあげたらしい。

それで方言で、物食みシージャ(むんかみシージャ)「物を食べるのは年上から」という言葉があるようさ。

## 海洋博公園管理センター

## 公園全体で遊ぶ

## 新春果報で〜びる

沖縄らしいお正月を体感できる“新春カリーステージ”や“干支まつわる工作教室”など家族そろってお楽しみいただけるイベントを実施しています。

- 1月1日(日/祝)～1月3日(火)
- お問い合わせ/  
業務課 TEL0980-48-2741

場所 海洋博公園内 無料



## 第33回 海洋博公園全国トリムマラソン大会

- 1月15日(日)
- 申し込みは終了しました。
- お問い合わせ/業務課 TEL0980-48-2741

場所 海洋博公園内・他 観覧無料

## 第6回 美ら海花まつり

ジンベエザメやマンタ、ヤンバルクイナの親子などを鮮やかな花で表現。草花にちなんだ体験イベントも開催。暖かい沖縄の冬を花いっぱい公園で楽しめます。

- 1月28日(土)～2月26日(日)
- お問い合わせ/業務課 TEL0980-48-2741

場所 海洋博公園内 無料

## 生き物とふれあう

## 冬休み イルカ学習会



- 12月23日(金/祝)～1月2日(月/祝) 16:20～17:00
- お問い合わせ/海獣課 TEL0980-48-2748

場所 イルカラグーン周辺施設 無料

## 春休み イルカ学習会

- 3月24日(土)～4月1日(日) 16:20～17:00
- お問い合わせ/海獣課 TEL0980-48-2748

場所 イルカラグーン周辺施設 無料

## 干支水槽

2012年の干支である辰にちなんだ生き物の展示紹介をします。

- 12月26日(月)～1月3日(火)
- お問い合わせ/魚類課 TEL0980-48-2742

場所 沖縄美ら海水族館 入館料のみ

科博コラボミュージアム in 沖縄美ら海水族館  
「宝石サンゴ展」

- 12月23日(金/祝)～3月11日(日)  
9:00～18:30
- ※3月は20:00まで

【講演会】  
1月8日(日) 14:00～15:30  
宝石サンゴとその仲間たち  
講師:並河洋氏

(国立科学博物館 動物研究部)  
野中正法  
(海洋博公園管理センター 魚類課)

対象:小学生以上  
定員:50名

- お問い合わせ/  
魚類課 TEL0980-48-2742

場所 沖縄美ら海水族館 4F イベントホール 無料



## 花と緑とふれあう

## 沖縄国際洋蘭博覧会

国内最大級のラン展。国内外から出展される1万点以上のランが美しさを競います。今年は「オーキッドファンタジー〜ランで織りなす、おとぎの世界〜」をテーマに子ども達と楽しめる幻想的なラン装飾と、各種イベントが盛りだくさんです。

- 2月4日(土)～12日(日)
- お問い合わせ/  
植物課 TEL0980-48-2741

場所 熱帯ドリームセンター 入館料のみ



## 植物のクラフト作り

- 12月26日(月)～3月31日(土)  
毎日開催

●1月〔12月26日(月)～1月31日(火)〕  
8:30～17:00  
オリジナルカレンダー作り  
ころころボールを作ろう

●2月〔2月1日(水)～2月29日(水)〕  
8:30～17:00  
押し花でしおりを作ろう  
アダンで星コロを作ろう

●3月〔3月1日(木)～3月31日(土)〕  
8:30～18:30  
メッセージカードを作ろう  
アダンでコースターを作ろう

●お問い合わせ/  
植物課 緑化相談係  
TEL0980-48-3782

場所 熱帯・亜熱帯 都市緑化植物園 無料



## ランの花でつくる絵本教室

- 1月8日(日) 10:00～17:00

講師:沖縄県子どもの本研究会理事 真栄城栄子氏  
定員:50名 材料費:350円

●お問い合わせ/植物課 緑化相談係 TEL0980-48-3782

場所 熱帯・亜熱帯 都市緑化植物園 有料

## 【お問い合わせ】海洋博公園管理センター TEL 0980-48-2741(代表)

●海洋文化館展示ホール休止について/海洋文化館展示ホールはリニューアル工事のため、平成23年11月1日(火)から休止となっております。リニューアルオープンは平成25年の春を予定しています。プラネタリウムは通常通り開館しています。  
※各イベントは内容の変更や中止となる場合がございます。最新情報や詳細はHP(oki-park.jp)等でご確認して頂くかお気軽にお問い合わせください。

## 総合研究センター

総合研究センターでは、財団の調査研究事業等から得られた成果を広く紹介することを目的に、普及啓発事業として「美ら海・美ら島自然教室」「美ら島・美ら海こども工作室」「専門家講習会」等を開催しています。

## 美ら海自然教室・美ら島自然教室

フィールドで見つけることのできる動植物やその標本を、身近な道具や顕微鏡等を用いて観察をします。また、生物の不思議や面白さ、観察の仕方、生態系や環境の重要性などを紹介します。

## ●魚の解剖

1月7日(土) 13:00～15:00  
総合研究センター視聴覚室/無料/定員:20名

## ●イカの秘密を探る

3月3日(土) 13:00～15:00  
総合研究センター視聴覚室/無料/定員:20名

## ●沖縄の植物の草木染め

3月10日(土) 13:00～15:00  
総合研究センター視聴覚室/無料/定員:20名



平成23年度の美ら海自然教室「甲殻類カニの秘密を探る」の様子

## 美ら島・美ら海こども工作室

身近にある石や植物を材料にするなどして、多様な玩具作りを行い創造性を養います。

## ●ススキのぼうきを作ろう

1月21日(土) 13:00～15:00  
総合研究センター視聴覚室/無料/定員:20名



平成23年度の美ら島・美ら海こども工作室「実と種子でクラフトを作ろう」の様子

## 専門家講習会

当財団で実施した調査研究の成果について専門家向けに講習会を行います。

## ●サンゴワークショップ

「サンゴの分類と同定2012」  
3月22日(木)～25日(日) 9:00～17:00  
総合研究センター/無料/定員:16名  
※4日間とも受講できることが条件です。



平成22年度のサンゴワークショップの様子

## 【お問い合わせ】総合研究センター普及開発課 TEL 0980-48-2266

※講座申し込みは、実施日の2ヶ月前より開始いたします。※講座の内容及び実施日等については変更となる場合がございます。ご了承ください。最新情報や詳細はウェブサイト(kaiyohaku.jp)等でご確認して頂くかお気軽にお問い合わせください。

## 首里城公園管理センター

## 首里城公園「新春の宴」

実施日:平成24年1月1日(日/祝)～3日(火) 計3日間 8:30～17:00  
場 所:首里城公園 御庭・下之御庭

## 【御座楽の演奏】

奉神門で毎朝8:30に行なわれている「御開門」後に王朝時代に演奏された御座楽を3日間毎日開催します。  
実施日:1月1日(日/祝)～3日(火)  
時 間:8:30～8:50  
場 所:首里城公園 御庭(雨天時の場合は、正殿内部) ※有料(入館料のみ)

## 【正月儀式 朝拝御規式】

第一部「子之方御拜」、第二部「朝之御拜」、第三部「大通り」の3部構成で琉球王朝時代、国王、王妃、高官等の参列する中、執り行われていた朝賀儀式を披露します。  
実施日:1月1日(日/祝)～2日(月)  
時 間:10:00～11:50  
場 所:首里城公園 御庭 ※有料(入館料のみ)



正月儀式「朝拝御規式」

## 【琉球芸能の宴】

新春を寿ぐ琉球舞踊(古典舞踊、雑踊り)、地域の民俗芸能などを披露します。  
実施日:1月1日(日/祝)～3日(火)  
時 間:12:30～17:00  
場 所:首里城公園 下之御庭 ※無料

## 【国王・王妃出御】

御座楽の演奏とともに、国王・王妃が揃って正殿から出御します。  
実施日:1月3日(火)  
時 間:10:00～11:00  
場 所:首里城公園 御庭 ※有料(入館料のみ)

## 【お茶・甘酒の振る舞い】

本部席横に振る舞いコーナーを設け、紅型衣装を身に纏った女性よりお茶・甘酒が振る舞われます。  
実施日:1月1日(日/祝)～3日(火)  
時 間:8:30～17:00  
場 所:首里城公園 下之御庭 ※無料



お茶・甘酒の振る舞い

## 首里城公園企画展

## 首里城のデザインⅢ

～Shurijo & Dragon～

首里城公園開園20周年記念イベント

■日時:12月23日(金/祝)～3月1日(木)  
■会場:首里城公園 有料区域  
南殿二階 特別展示室

首里城正殿で、最も象徴的な「龍」の模様でデザインされた琉球の工芸品の展示を行い、直径80cmの大盆を初お披露目します。



## FM沖縄「風に吹かれて首里城めぐり」

毎週木曜日朝9:45から5分間、FM沖縄「Hello Good Day」内の1コーナーにて、首里城に関するへ〜と思う様々な話題をお送りしています。

ポッドキャスト配信 http://blog.fmokinawa.co.jp/shurijo/podcast/

## 【お問い合わせ】首里城公園管理センター TEL 098-886-2020

※各イベントは内容の変更や中止となる場合がございます。最新情報や詳細はHP(oki-park.jp)等でご確認して頂くかお気軽にお問い合わせください。